

被災地におけるサロン活動の意義と課題

～福島県外避難者を対象としたサロン活動の経過から～

【みやぎ心のケアセンター】 渡部 裕一 / 大場 幸江 / 大泉 みのり / 樋口 徹郎

Ⅰ 調査の目的

2011年3月11日に発生した巨大地震により、太平洋沿岸域には津波が到来、死者行方不明者18,430名（2019.3.10時点）という甚大な被害が生じた。さらに福島第一原子力発電所事故が発生し、多くの福島県民が県外避難を強いられることとなった。隣県の宮城県には、福島県沿岸域の市町村から多くの方々が避難し、その後避難者を対象にしたいいくつかのサロン活動が開催されるようになった。それらは現在も複数の支援団体によって継続されている。

みやぎ心のケアセンターでは、他団体が開催していたサロン活動の1つに2014年度から協力することになり、2017年度からは主催団体として活動を引き継ぐことになった。内容は季節ごとの行事、食事作り、茶話会などで、参加者が各々に差し入れを持ち寄るなど、和やかな雰囲気で開催されている。

震災から8年が経過し、宮城県が提示する震災復興計画も終盤に差し掛かっている。また、このサロン活動についてもその進退や意義が問い直されている。本研究では、参加者へのアンケート調査ならびにヒアリング結果から、このサロンが持つ意義について検証するとともに、県外避難という特殊な状況下におかれた方々が直面する課題について報告する。

Ⅱ 調査内容

- 1 対象 ・サロン参加者18名
 - ・年齢：74.8±6.3（61～87）歳
 - ・性別：男性7名（38.9%） 女性11名（61.1%）
 - ・調査実施期間：平成31年2月～3月

2 実施方法

サロン参加者に対し以下の2つの方法を用いて調査を行った。

- 1) 健康関連QOL（HRQOL: Health Related Quality of Life）尺度SF-8と独自作成した質問票を郵送、参加者に対するアンケート調査を実施した。生活状況や健康度について把握するとともに、サロンをどのようにとらえているかについて確認した。
- 2) 現在の参加者並びにサロンの運営に関与してきた関係者へのヒアリングを実施した。参加者に対しては、主に生活状況についての聞き取りを実施。関係者にはサロン成り立ちまでの経緯、これまでの運営上の課題等について聞き取りを行った。

Ⅲ 結果

アンケート回収率は100%で欠測値はなかった。SF-8では2007年国民標準値と比較すると全般的に得点率は低い傾向となったが、平均年齢を考慮すると必ずしも低いとは言いきれない。

独自の質問項目に対する回答では、サロンが参加者の外出や交友範囲を広げるきっかけになっており（「Q.外出の機会になっている」大いになっている・少しなっている83.3%）（「Q.交流範囲が広がった」非常にそう思う・ややそう思う88.9%）、サロン活動の今後についても継続を望む声が多いことがわかった（「Q.サロンの今後について」出来るだけ長く継続してほしい・もうしばらく継続してほしい77.8%）。

ヒアリング結果からは、サロンの継続を望む声が多い一方で、全て自主運営で継続することに困難さを感じ

じており、何らかの外部支援が必要と考える参加者が多いことが明らかとなった。また、参加者は事故後すぐに宮城県内に転居した訳ではなく4回～14回（平均7.2回）に及ぶ転居を繰り返していたこと、避難や転居の過程で身体的、精神的な不調を感じた方々が少なくなかったこと、現在も生活基盤の確保や将来設計に対する不安を感じている方がいることが明らかとなった。

Ⅳ 考察

今回の調査では、震災から8年が経過した現在でも「あいまいな喪失」の中で生活している人たちが多いことが推察された。ヒアリングではこれまでの避難先で「賠償金は沢山もらったの？」等の質問をされ傷ついた、との回答が複数あった。避難先で傷つく経験をしながら度重なる転居を繰り返してきた人たちにとって、地元のことを気兼ねなく話せ、震災後の気苦労をいたわり合えるこのサロンは貴重な場である。一方で、プログラム内容のあり方や今後の運営に対する要望等も上がっており、サロン活動のあり方を具体的に検討する場が今後必要になると考えられる。

第Ⅰ章

復興までの道のり

第Ⅱ章

当センターを
立ち上げるまで

第Ⅲ章

全体の事業展開に
ついて

第Ⅳ章

業務統計報告
『事業項目別の経活動報告』

第Ⅴ章

地域センターごとの
活動報告

第Ⅵ章

調査研究報告および
他誌掲載原稿

第Ⅶ章

寄
稿

資
料

被災地におけるサロン活動の意義と課題 ～福島県外避難者を対象としたサロン活動の経過から～

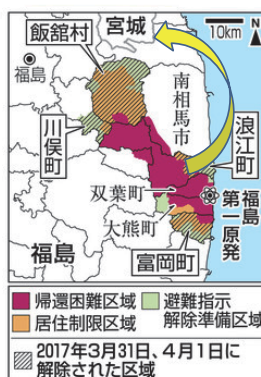
渡部 裕一(発表者) 大泉 みのり
大場 幸江 樋口 徹郎



公益社団法人 宮城県精神保健福祉協会
心のケアセンター
Miyagi Disaster Mental Health Care Center

本発表に用いる人物写真の使用については、本人の承諾を得ています。

はじめに サロン立ち上げまでの経緯



- 2011年3月11日の東日本大震災により沿岸域には津波が到来、甚大な被害を被った。
- さらに原子力発電所事故により、多くの福島県民が県外避難を強いられた。
- 宮城県にも多くの方々が避難し、その後避難者を対象にしたサロンが開催された。
- みやぎ心のケアセンターでは他団体が実施するサロンに協力。2014年度から引継ぎ、主催団体となった。

サロンの概要

開催頻度	毎月1回、金曜日の午後に開催
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ➢ お茶会、調理、お花見などの季節に応じた行事が中心。 ➢ その他、参加者からの要望に応じて企画。
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 他のサロンに比較すると男性の参加率が高い傾向。 ➢ 登録者は20名程。毎回の参加者数は15～18名程で夫婦での参加率も高い。 ➢ 概ねメンバーが固定されており、毎回の参加者数の増減は少ない。 ➢ 自己負担は概ね200円～2000円の範囲。

調査の目的

1. 復興支援計画も終盤となった現在、今後のサロン活動のあり方が問われている。まずは参加者の**現状とニーズを正しく把握**する必要がある。
2. このサロンの取り組みを分析することは、**今後の災害時のサロン活動、ひいては災害支援のあり方に対する示唆**となり得ると考えたこと。
3. 震災と原発事故によって県外避難を強いられた方々は、特有の経過や課題を抱えており、**避難者の実状と想いを広く発信**する必要がある。

調査の概要

- 1 対象
 - ・サロン参加者**18名**
 - ・年齢 **74.8±6.3(61～87)歳**
 - ・性別 **男性7名(38.9%) 女性11名(61.1%)**
- 2 実施方法

以下の2つの方法を用いて調査を行った。
(2019年2月実施)

調査項目	内 容
アンケート調査	①健康関連QOL尺度 SF-8 ②独自作成のアンケート項目 生活状況や健康度、サロンに関する意見を確認
ヒアリング調査	参加者の生活状況とサロンに対する具体的な意見について ＊サロン運営の関係者にもこれまでの経緯、課題等について聞き取りを実施。

・福原 俊一、鈴嶋 よしみ、SF-8日本語版マニュアル・特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

調査結果 SF-8

公益社団法人 宮城県精神保健福祉協会
心のケアセンター
Miyagi Disaster Mental Health Care Center

アンケート調査結果 SF-8項目

回 答 項 目	平均値
全体的にみて、過去1か月間のあなたの健康状態はいかがでしたか。	43.660
過去1か月に、体を使う日常活動(歩いたり階段を昇ったりなど)をすることが身体的な理由でどのくらい妨げられましたか。	28.860
過去1か月に、いつもの仕事(家事も含みます)をすることが、身体的な理由でどのくらい妨げられましたか。	33.631
過去1か月に、体の痛みはどのくらいありましたか。	43.718
過去1か月に、どのくらい元気でしたか。	30.256
過去1か月に、家族や友人とのふだんのつきあいが、身体的あるいは心理的な理由で、どのくらい妨げられましたか。	39.858
過去1か月に、心理的な問題(不安を感じたり、気分が落ち込んだり、イライラしたり)に、どのくらい悩まされましたか。	31.789
過去1か月に、日常行う活動(仕事、学校、家事などのふだんの行動)が、心理的な理由で、どのくらい妨げられましたか。	41.180

・福原 俊一、鈴嶋 よしみ、SF-8日本語版マニュアル・特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

アンケート調査結果 SF-8項目

全体的に見て過去1か月間のあなたの**健康状態**はいかがでしたか。

	割合
1 非常に良い	0.0
2 とても良い	11.1
3 良い	61.1
4 あまり良くない	16.7
5 良くない	5.6
6 ぜんぜん良くない	5.6
計	100.0

過去1ヶ月で体を使う日常活動をする**ことが身体的な理由**でどのくらい妨げられましたか

	割合
1 ぜんぜん妨げられなかった	33.3
2 わずかに妨げられた	38.9
3 少し妨げられた	11.1
4 かなり妨げられた	16.7
5 体を使う日常活動ができなかった	0.0
計	100.0

・福原 俊一、鈴嶋 よしみ、SF-8日本語版マニュアル・特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

アンケート調査結果 SF-8項目

過去1か月間に心理的な問題(不安を感じたり気分が落ち込んだり、イライラしたり)にどのくらい悩まされましたか

	割合
1 全然悩まされなかった	22.2
2 わずかに悩まされた	33.3
3 少し悩まされた	27.8
4 かなり悩まされた	5.6
5 非常に悩まされた	11.1
計	100.0

過去1ヶ月に家族や友人とのふだんのつきあいが、身体的あるいは心理的な理由でどのくらい妨げられましたか

	割合
1 ぜんぜん妨げられなかった	38.9
2 わずかに妨げられた	38.9
3 少し妨げられた	16.7
4 かなり妨げられた	5.6
5 つきあいができなかった	0.0
計	100.0

・福原 俊一、鈴嶋 よしみ、SF-8日本語版マニュアル・特定非営利活動法人健康医療評価研究機構、京都、2004

調査結果 SF-8 まとめ

- それぞれの質問項目における値はSF-8の標準値と比較すると全体的として低い結果。
- 身体的状況、健康状況では良好の割合が高いが、「良くない」「妨げられた」などの回答も一定数存在。
- 心理的な問題においては「非常に悩まされた」まで、さらに回答が幅広い傾向がある。
- 「ふだんのつきあいができなかった」との回答はなく、コミュニケーションは保たれている。

調査結果 アンケート項目



アンケート調査の結果 アンケート項目

サロンは参加しやすいですか

	割合
1 とても参加しやすい	5.6
2 参加しやすい	77.8
3 普通	16.7
4 参加しにくい	0.0
5 とても参加しにくい	0.0
計	100.0

サロンで行われるプログラムの内容をどう思いますか

	割合
1 とても楽しい	5.6
2 まあまあ楽しい	61.1
3 普通	33.3
4 あまり楽しくない	0.0
5 楽しくない	0.0
計	100.0

調査の結果 アンケート項目

サロンの今後についてどうお考えですか

	割合
1 出来るだけ長く継続	50.0
2 もうしばらくは継続の方がよい	27.8
3 わからない	22.2
4 終了する準備を初めてもよい	0.0
5 すぐに終了して構わない	0.0
計	100.0

サロンでは原発事故のことが話題になりますか

	割合
1 大いに話題になる	16.7
2 少し話題になる	55.6
3 どちらともいえない	5.6
4 あまりならない	16.7
5 話題にならない	5.6
計	100.0

調査の結果 アンケート項目

サロン参加者とサロン以外で交流することがありますか

	割合
1 大いに	38.9
2 少し	44.4
3 どちらともいえない	5.6
4 ほとんどない	11.1
5 全くない	0.0
計	100.0

サロンに参加するのは故郷のことを気兼ねなく話せるから

	割合
1 大いにそう思う	50.0
2 ややそう思う	38.9
3 どちらともいえない	11.1
4 あまりそう思わない	0.0
5 全くそう思わない	0.0
計	100.0

調査の結果 アンケート項目

今後他のサロンも利用してみたいと思いますか

	割合
1 大いにそう思う	22.2
2 ややそう思う	61.1
3 どちらともいえない	11.1
4 あまりそう思わない	5.6
5 全くそう思わない	0.0
計	100.0

サロンに参加してどのくらい満足感を得られましたか

	割合
1 大いに満足	16.7
2 やや満足	61.1
3 どちらともいえない	22.2
4 やや不満	0.0
5 大いに不満	0.0
計	100.0

調査結果 アンケート項目①

肯定的な回答が約8割だった項目

- 「サロンは参加しやすい」
- 「サロンで交友範囲が広がった」
- 「サロン以外でも参加者と交流がある」
- 「故郷のことを気兼ねなく話せる」
- 「サロンは継続してほしい」
- 「ほかのサロンも利用してみたい」
- 「外出の機会になっている」

調査結果 アンケート項目②

- サロンに対して「**とても参加しやすい**」、プログラムの内容について「**とても楽しい**」とする回答割合は少なかった。
- サロンで「**原発のことが話題になる**」との質問項目においても「**大いに話題になる**」との回答数は少なく、分散する傾向があった。
- ほか、質問項目「**サロンに参加したことで生活に変化はあったか**」「**福島県内や居住地の情報が得られている**」に対する「大いに变化した」「大いにそう思う」の回答割合も少ない傾向となった。

17

調査結果 ヒアリング



公益社団法人 宮城県精神保健福祉協会

心のケアセンター

Miyagi Disaster Mental Health Care Center

18

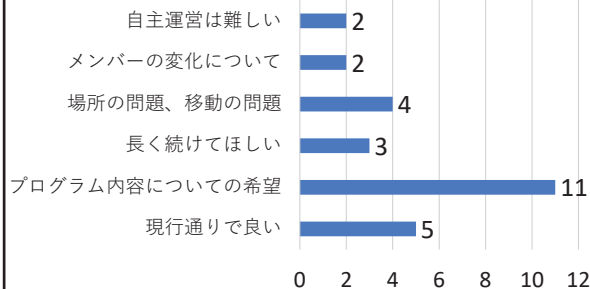
ヒアリング結果から

避難・転居回数	平均 7.2回 (4回～14回)
宮城県居住年数	平均 5.37年 (3年～8年)
サロン参加年数	平均 3.97年 (1年～6.5年)

19

ヒアリング結果から

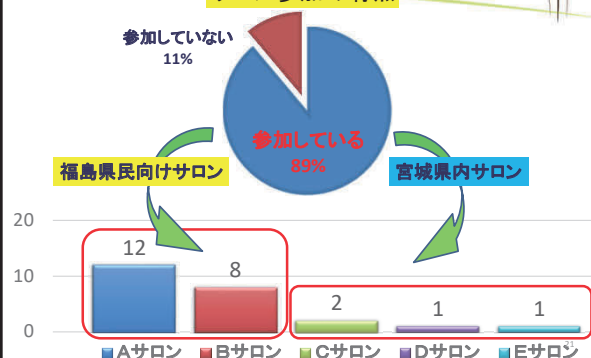
現在のサロンへの要望



20

ヒアリング結果から

サロン参加の有無 複数回答あり



調査結果 ヒアリング

「昔は一日働けたのに、精神的に出来なくなった。」
「避難所で身体面で不調が生じた。」

- 参加者は宮城県に居住するまでに相当数の避難と転居を繰り返しており、心身に対する負担も大きかったことが明らかとなった。

「夕食は長男宅で食べている。」
「同じ市内にいる孫と遊ぶ。」

- 家族が「減少した」との回答割合も高いが、何らかのつながりは維持されており、孤立状況にはない。

「こじんまりしていた時の方がよかった。」

「もっと参加者が増えてほしい。」

- プログラムに対する多様な要望をそれぞれが持っている。サロン成り立ちに由来すると考えられる。

22

調査結果 ヒアリング

「お金があると思われぬように気を付けている。」
「福島から転居したことを告げると、賠償金の話になるので被災者といわないようにしている。」

- 参加者の多くが避難の過程で心無い言葉に不快な思いをした経験を持っている。

「地元に戻るか、宮城で事業を始めるか迷っている。」

「お墓もあるので戻りたいが、戻っても何も無い。」

「地元に戻りたいが、子どもに反対されている。」

- 震災から8年経った現在、前向きに居住地でのつながりを広げようとする人、これから先どうするか判断しかねている人、日々の暮らしに虚無感を感じている人などさまざま。

23

考 察



公益社団法人 宮城県精神保健福祉協会

心のケアセンター

Miyagi Disaster Mental Health Care Center

24

考 察 1/3

【避難後の生活がおよぼした影響】



- ①避難の過程で生じた心身への負担。
- ②賠償金等に対する周囲の声。
- これらが福島県避難者のみを対象としたサロンへの参加率の高さに影響か。
- 質問項目「故郷のことを気兼ねなく話せる」への高評価にもつながっている。

25

考 察 2/3

【サロンに求められている要素】



- ・ヒアリングから参加者の背景の多様さ、複雑さがあきらかに
- ・「参加のしやすさ」「プログラム」評価、「原発が話題になる」の回答幅に影響している可能性。
- ・このサロンの特色は「プログラムの中身より雰囲気？」

26

考 察 3/3

【参加者が抱える現在の課題】



- ・現在も抱える先行きの不安と葛藤。
- ・「過去の生活への深い愛着」と「現在の生活を大切にする感情」が共存する「曖昧な喪失」
- ・その狭間を「行き来」できるのが現在の居住地といえる。
- ・質問項目「サロン以外でも参加者と交流」の割合高い。
- ・レジリエンスを培う場としてのサロンの役割。

27

ま と め

- ・ようやく居住地でのつながりが広がりがつつある一方、引き続き、サロンの継続を望む声、気兼ねなく話せる場に対するニーズは依然として高い。
- 復興支援事業の整理の中で、参加者ニーズが見失われることのないようにすることが支援者の役割。
- 今後のさまざまな状況の変化も考慮しつつ開催を検討していきたい。



28